

## 前思春期の子どもが空想の友達をもつ心理的な意義

——『思い出のマーニー』の分析を用いて——

8C22101 新井 杏子

(指導教員 難波 愛)

前思春期とは、10歳から12歳の短い期間を指し、重要な他者との関係の変化や、生死を通して世界の中の自分を意識し直すなどの心理的な変化が起こる時期である。また、前思春期の子どもが主人公として描かれた作品では、その子どもが空想の友達をもつ場合が多い。空想の友達の存在が特徴の1つである「空想傾性」は、創造性や共感性と関連がある一方で、PTSDや悪夢想起といった精神的病理との関連性も報告されている。以上のことから、本研究では「前思春期の子どもは、空想の友達との出逢いや遊びを通して、アイデンティティの確立につながる精神発達を促す。また、死別を体験した前思春期の子どもにとって、空想の友達は、死別体験による心の傷を癒す役割を担い、その子どもの精神発達を促進させる存在である」という仮説のもと、先行研究の知見や『思い出のマーニー』の分析を通して、前思春期の子どもが空想の友達をもつ心理的な意義を検討した。

その結果、物語分析では、主人公アンナと空想の友達マーニーとの間にチャムシップが形成され、アンナは、喜怒哀楽を素直に表現するマーニーをモデルとして、感情表出や他者との関わり方を学ぶことにより、精神的な強さを得たことが示された。一方、マーニーは遊びや会話を通して、アンナの死別した実母及び祖母に対する怒りや社会からの疎外感を癒し、アンナの感情表出の促進や社会性の向上を援助する役割を担っていたと結論づけた。次に、前思春期の子どもに対する空想の友達の役割については、持ち主である子どもの「鏡」として機能し、その子どもの自己や自我の発達を促すことと考えられ、特に、死別を体験した前思春期の子どもに対しては、その心の傷を癒し、滞っていた精神面の発達やレジリエンスの促進に寄与していると考えられた。最後に、前思春期の子どもが空想の友達をもつ心理的な意義は、空想の友達との交流を通して、その子どもが社会の中で抑圧していた自分らしさや自覚していなかった新しい側面、乗り越えなければならない課題といった自分の内面に向き合い、自分自身を主観的に捉えることと考えられる。今後の展望では、物語分析における前思春期の精神発達と空想の友達との関連性について、文化的要因や時代背景の観点を含めた検討を行う必要がある。また、アニメーション作品の流行や子どものスマートフォン所持率の上昇といった近年の社会的変化は、子どもの空想の友達の持ち方に関する検討をより深めることができる視点であると考えられる。

## ハラスメントの目撃・被害経験が攻撃性に与える影響 ——ソーシャルサポートによる攻撃性緩和効果——

8C22102 大柿 玲

(指導教員 山本 恭子)

職場のハラスメントは最もパワーハラスメントの被害率が高く、過去3年間減少もしていない。社会的関係への所属欲求が満たされない場合には攻撃性が高まるとする「所属欲求仮説」によると、職場からの排斥経験と捉えられるハラスメント被害は攻撃性を高めるのではないかと考えられる。しかし、職場以外のソーシャルサポートにより所属欲求が満たされれば、攻撃性への影響は緩和されることが推測される。本研究では職場におけるハラスメントの被害・目撃経験が攻撃性を高めるのか、さらにソーシャルサポートが両者の関係に影響を及ぼすのかについて検討する。ハラスメントと攻撃性の時間的な因果性を検討するため2時点調査を実施した。仮説1は「ハラスメントを受けている人は攻撃性が高くなる」、仮説2は「ハラスメントを受けている人は攻撃性が高くなるが、ソーシャルサポートがある人はハラスメントから攻撃性への正の影響が抑制される」であった。

3ヶ月程度の期間をあけて実施した2回の調査で254名(男性143名、女性111名)が有効回答数であった。質問紙にはハラスメントの目撃・被害経験を測る尺度、攻撃性尺度(短気、敵意、身体的攻撃、言語的攻撃)、ソーシャルサポート尺度(友人、家族、大切な人からのサポート)を使用した。

1時点目(T1)と2時点目(T2)における下位尺度得点の相関分析を行ったところ、T1目撃ハラスメントはT2短気・敵意・身体的攻撃と正の相関が、T1被害ハラスメントはT2敵意・身体的攻撃と正の相関があった。次に、ハラスメントと攻撃性の時間的な因果関係を検討するために、交差遅延効果モデルによる分析を行った。この際、ソーシャルサポートの影響を検討するため、平均値により高低群に分類し分析を行った。ソーシャルサポート高群ではT1ハラスメント被害がT2の短気、敵意、言語的攻撃に負の影響があった。ソーシャルサポート低群でもT1ハラスメント被害からT2敵意に対して負の影響があった。さらに、ソーシャルサポート高低群共に、T1敵意がT2ハラスメント目撃・被害経験に対して正の影響があった。

仮説1「ハラスメントを受けている人は攻撃性が高くなる」について、相関分析では一致する関連が見られたものの、交差遅延効果モデルにおいては支持する結果は認められなかった。仮説2は仮説1を前提とする仮説であるので、支持されたとは言い難いが、ソーシャルサポートの程度によってハラスメントから攻撃性への影響が異なることは明らかとなった。一方、T1敵意からT2被害・目撃ハラスメントに対する正の影響が認められた。敵意的な人は被害的な認知を持ちやすく、ハラスメントという攻撃の場面において敏感で認識しやすいと考えられる。以上のことから、ハラスメントの目撃や被害から攻撃性の影響は見られなかったが、反対に攻撃性の敵意感情がハラスメントの目撃や被害に影響を及ぼしていることが示唆された。

## 「叱る」がマルトリートメントに至る要因の解明と親への予防教育

8C22103（著者の希望により氏名不掲載）

（指導教員 難波 愛）

本研究では、マルトリートメントの中でも現在の子育てにおいて多用されているであろう「叱る」に焦点を当て、「叱る」がマルトリートメントに至る要因の解明と、親への予防教育に関する文献研究を行った。その結果、①子育ての実態、②戦後日本の子育て環境や悩みの変遷について述べた後、③ひとり親、④親の子どもに対する認知、⑤叱ることの常態化、⑥孤立感、の4つを「叱る」がマルトリートメントに至る要因として挙げた。しつけと虐待について、⑦「叱る」とマルトリートメントの関連として述べた後、そこに親の意図は関係なく、子どもへの影響のみで判断するという⑧マルトリートメント予防の必要性について述べた。

次にマルトリートメント予防のための親への予防教育として、市町村での子育て支援を考えた。①兵庫県内の神戸市、姫路市、西宮市、明石市、豊岡市の5つの都市の子育て支援の実態を項目別に表にまとめ、それぞれの支援の特色を比較した。②行政の子育て支援における心理職の活動、課題点について述べた。最後に、文献研究として調べた『「叱る」がマルトリートメントに至る要因』と、『親への予防教育』の2点をつなぎ合わせ、「今後のマルトリートメント予防のための子育て支援策」とし、考察した。「ひとり親」には『経済的な支援』が第一段階として特に有用である。心理士が出来る支援として、必要時に速やかに親への情報提供を行うため、経済的な支援の知識を持っていることが挙げられる。「親の子どもに対する認知」、「叱ることの常態化」には、『相談支援』を行うのが良いと推測できる。早い段階で、親に対する適切でかつ具体的な分かりやすい心理教育を行える場所や機会をより多く確保するべきである。そのため、親が気軽に利用できるよう心理士がより広範にアウトリーチが出来る仕組みを整えることが重要である。「孤立感」には、『社会資源における親支援』が有用であると考えられる。親子で無料で利用できる児童館やプレイルームといった場所を増やすことや、そこに心理士を配置し、困り感を抱えている親が『どこに困っているのか』を丁寧に聞き取るような支援や、子どもの発達や子育てに関する心理教育などのきめ細やかな支援が、親の「孤立感」の軽減につながるのではないだろうか。

本研究の今後の課題は、①研究方法としてインタビューや質問紙調査を行い、実際の親の声や満足度を取り入れた研究を行いたい。次回研究の機会があれば、実際の声も取り入れた研究方法を検討したい。②また、マルトリートメントに至る親側の要因だけでなく、子ども側の要因はどのようなものがあるのか、そしてそれらに対する支援についても考えたい。

日本における Highly Sensitive Person (HSP) の研究動向  
——「美的感受性」因子に着目した文献的検討——

8C22104 川上 綾音

(担当教員 石崎 淳一)

本研究では、日本における HSP (Highly Sensitive Person) の研究について概観することと HSP を「美的な感受性」の視点に注目して検討することを目的とした。学術情報データベースで検索を行った 26 件の文献のうち、心理尺度に関する文献を中心に扱うこととした。

HSP は、Aron & Aron (1997) によって提唱された概念であり、生得的な特徴であり感覚器自体ではなく感覚情報の脳内処理過程における基本的な個人特性のことを指す SPS (Sensory Processing Sensitivity) が高い人のことを HSP としたことがわかった。

HSP を測定する心理尺度について、Aron & Aron (1997) の HSPS と日本で作成された 5 つの尺度論文について検討した。Aron & Aron (1997) と高橋 (2016)、船橋 (2013) と飯村 (2016) のように、先に作成された尺度をもとに日本版や違った年齢を対象としたものを作成している尺度があることがわかった。また、HSP の一般人口における割合について、Aron & Aron (1997) は 15% から 20%としているが、HSPS のカットオフ値についての言及はなく、日本で開発および作成された尺度についてもカットオフ値について言及しているものは見られなかった。性差について Aron & Aron (1997) は、女性は男性より有意に高い得点であるとしている。高橋 (2016) の HSPS-J19 でも原版と一致している結果となっている。因子構造については、本研究における HSP を測定する尺度とそれに類似する尺度については、3 因子構造を採用しているものがほとんどであった。

これらの心理尺度から HSPS-J19 を取り上げ、その下位因子である美的感受性因子について検討した。本研究で扱ったのは HSPS-J19 を用いた 7 件の研究である。HSP 全体、下位因子である低感覚閾と易興奮性においては、精神的回復力や精神的健康、自尊感情と負の相関が示されるなど、HSP 特性は生きていくうえで不利になるものであると考えられる結果が多く見受けられた。一方で、日本の研究における美的感受性因子に関する結果は、精神的回復力や人生に関する満足度、自尊感情と正の相関を示すなどポジティブなものが多く見られ、精神的生活を豊かに送ることができる可能性が潜んでいると言えるという結果であった。HSP 特性のうち特に美的感受性を持ち合わせている人は、そうでない人より多くのポジティブな感情が生起されることもあり、それらの特性を理解したうえで生活することで、より豊かな生活を送ることも可能となることが考えられる。美的感受性因子の安定性については、今回対象とした研究はどれもそれぞれの研究データに探索的に因子分析を行って見出したものではなく、美的感受性を「感覚処理感受性」に含めて 3 因子構造として捉えることに対して注視していく必要があるという結果であった。

今後、海外の研究を踏まえて日本の研究についても比較検討していくことが課題であると考えられる。実際には国外の HSP 研究は日本の研究より多くなされており、それぞれの国における文化による影響も考慮していく必要があるだろう。

## 創作物の描写に見る解離性同一症イメージの特性

### ——映画の質的分析と文献研究による検討——

8C22105 小玉 和瑚

(指導教員 石崎 淳一)

解離性同一性障害を題材とする創作物は後を絶たない。精神疾患については人々が疾患に対して抱くイメージが実際の疾患像とは異なっていることも多い。解離性同一性障害はその傾向が顕著に認められ、創作物においても他の精神疾患と比較すると極端な描写が行われていることが多い。先行研究においても創作物を用いて精神疾患の検討を行ったものは存在するが、実際の精神疾患と人々が抱くイメージの間に生じる矛盾の程度について言及されているものは多くない。また、解離性同一性障害の発症要因として幼少期の被虐待体験があることは周知の事実であるが、それ以外の要因の存在も提唱されている。

これらのことを踏まえ、本研究では解離性同一性障害に対して人々が抱くイメージや創作物における描写の偏りを「解離性同一症イメージの特性」と定義し、これについて明らかにするために「1. 精神疾患の描写と相違点」、「2. 解離性同一性障害の描写の特性」、「3. 映画における解離性同一性障害の発症要因と専門家の見解」の3点から検討を行った。研究方法は解離性同一性障害を題材とする映画の質的分析と文献研究を採択し、比較対象としてうつ病と統合失調症を扱った。その結果、1点目について、解離性同一性障害を題材とする映画では治療としてカウンセリングや催眠暗示が行われるなど現実的な描写も認められる反面、犯罪や人格統合については事実と異なる描写が認められた。その一方で、うつ病や統合失調症では概ね現実には即した描写が行われていた。2点目については、解離性同一性障害では主治医による不適切行為が描写されており、犯罪についても最も突飛な描写が認められた。3点目については解離性同一性障害の発症要因として幼少期の被虐待体験以外に対人関係などの要因があることが指摘されており、本研究で用いた映画でも従来考えられていた要因以外によって解離性同一性障害を発症しているものがあることが明らかになった。

解離性同一性障害を題材とする創作物において実際と誤った描写が認められる背景には「描写の可塑性の高さ」という要因があると考えられる。創作物に多重人格者が登場することで自由に描写を行うことが可能となる。停滞していた物語に深みが加わり、人々の関心を集めることができる。そのために事実と異なる描写が繰り返される。犯罪の描写についても、実際の症例など様々な要因が複合的に結合した結果、生じたものであると考えられる。

本研究には創作物の描写を通して人々が精神疾患に対して抱くイメージが明らかになるという研究意義があった。本研究が精神疾患、とりわけ解離性同一性障害に対するバイアスを意識し是正する契機となれば幸いである。

マインドフルネスが SC およびストレス反応に及ぼす影響

——大学生・大学院生を対象としたマインドフルネストレーニングによる検討——

8C22106 佐江 徹

(指導教員 小久保 香江・中川 裕美)

本研究の目的は、マインドフルネストレーニング(以下、MT)を実施し、セルフ・コンパッション(以下、SC)およびストレスなどメンタルヘルスに関連する指標への影響を検討することを目的とした。研究 1 では、MT によって SC の向上を促すという仮説のもと、マインドフルネスが SC およびメンタルヘルスに対して及ぼす影響について検討した。MAAS 得点、SC ポジティブ、SC ネガティブ、ストレス反応を変数として、パス解析を行った。結果、MAAS 得点からストレス反応へ有意なパスは認められなかった。一方で、MAAS 得点からストレス反応へ負の影響、MAAS 得点から SC ネガティブへ負の影響、SC ネガティブからストレス反応へ正の影響が認められた。結果より、マインドフルネスと SC の関連について、SC ポジティブに有意な影響は観察されず、SC ネガティブにおいては有意な影響が認められた。研究 2 では、12 名の学生を対象に、簡便で実施可能かつ短期間の MT を実施し、マインドフルネスと SC の関連およびメンタルヘルスに関連する指標への影響について検討した。測定時期(MT 前 - MT 終了時)を独立変数とし、MAAS 得点、SC ポジティブ、SC ネガティブ、職業性ストレス簡易調査票 57 項目のストレス得点および下位項目、POMS2 の総合気分得点(以下、TMD 得点)および下位項目を従属変数として対応のある  $t$  検定を行った。さらに、マインドフルネス傾向と MT の体験の関連について検討するため、MT の前後 (2) × 初回 MT 参加時のマインドフルネス得点の高低による群分け (MAAS 高群/MAAS 低群) (2) の混合計画の分散分析を行った。結果、MT 期間前後において MAAS 得点および SC ポジティブ、SC ネガティブには有意な変化はみられなかった。ストレス得点については有意な得点の低下が認められたことから、短期間の MT でもストレスを低減した。一方で、マインドフルネスや SC の向上には期間が不足していた可能性がある。TMD 得点においても MT の実施前後で有意な得点の低下が確認された。分散分析では、SC ポジティブは、両群に交互作用や主効果は確認されなかった。SC ネガティブは、MAAS 高群において MT 期間の前後で交互作用がみられ、得点が低下した。つまり日常生活でマインドフルネスを頻繁に体験していた参加者は短期間の MT であっても SC ネガティブの影響が低減した。総合考察として、研究 1, 2 においてマインドフルネスがストレスを低減させる可能性が示唆された。また研究 2 では、マインドフルネスの高さが SC ネガティブの影響を低減させ、この過程がストレス低減に起因する可能性も示唆された。

スクールカーストの構造と機能  
——大学生のインタビュー調査を通して——

8C22107 (著者の希望により氏名不掲載)

(指導教員 道城 裕貴)

著者の希望により要旨不掲載

## 販売スタッフの装いおよび接客態度が対人印象に及ぼす影響

8C22108 成瀬 さくら

(指導教員 毛 新華)

我々は他者と関わる際、相手の断片的な情報を使用して相手の全体像を判断するという対人印象評価を行っており、様々な対人場面において重要な役割を果たしている。それは、消費者行動時においても行うとされ、特に接客業にとっては、良い第一印象が仕事の円滑さへと繋がるため、身だしなみや接客態度等、マニュアルに細かに記載がなされている。

これらを踏まえ、本研究では、販売スタッフの装いと態度の違いが対人印象に及ぼす影響を調べることを目的とし、関西地域に在学している大学生 145 名(男性 65 名, 女性 77 名, どちらでもない 3 名; 平均年齢 19.5 歳,  $SD = 1.66$ )を対象に、質問紙による調査を行った。

対人印象評価尺度 18 項目について因子分析を行った結果、真面目さを主とした対人魅力に関する「誠実性」因子、対人距離や社交性に関する「外向性」因子の 2 因子が得られた。次に、対人印象評価尺度の各因子を目的変数、各装いと態度を説明変数とした参加者内の 2 要因の分散分析を行った。その結果、「誠実性」因子においては、装いの主効果と態度の主効果が有意となった。良装いの方が悪装いよりも、良態度の方が悪態度よりも誠実性得点が高かった。また、装いと態度の交互作用も有意傾向となった。「外向性」因子においても装いの主効果と態度の主効果が有意となった。悪装いの方が良装いよりも、良態度の方が悪態度よりも外向性得点が高かった。なお、対人的やりとりには「解読」能力が重要な関わりを持つことから、ソーシャルスキル自己評価尺度の得点をもとに、解読能力高群と低群に分けての検討も行った。結果は、群分けなしの場合と同様の結果が得られた。ただし、「誠実性」因子において、解読能力高群のみ装いと態度の交互作用がみられた。

総括すると、良装いおよび良態度の販売スタッフは誠実な印象が抱かれる上、対人魅力が比較的高く、悪装いおよび悪態度の販売スタッフは外向的な印象が抱かれることが明らかとなった。つまり、悪い装いが一概に悪い評価に繋がるわけではなく、それを活かしてポジティブな方向へと繋がる可能性も示唆される知見が得られた。また、解読能力が高い者は、物事の良し悪しだけでなく、細かな部分を含めて弁別することができるといえる。なお、他業務の場面を用いた場合や、男性の販売スタッフの場合、マスクを非着用の場合など、刺激素材の変更によって抱かれる印象が異なる可能性が挙げられる。今後の「販売スタッフの対人印象の形成」に関する研究の精緻化に向けて、これらの点を検討する必要があるといえよう。

## 吃音に対する支援の現状と今後の展望

### ——公認心理師の役割に焦点を当てて——

8C22109 羽賀 大輝

(指導教員 道城 裕貴)

本研究の目的は、吃音に対する文献展望を通して支援の現状を把握し、吃音当事者やその関係者に対する支援の展望について検討することであった。また、吃音臨床の分野における公認心理師の役割に焦点を当てて、吃音当事者やその関係者に対する支援の在り方について検討することも目的とした。コンピューターサーチやハンドサーチにより抽出された 37 編の論文を、研究手法によって 4 つに分類した。分類の結果、面接、質問紙調査、レビューに分類された 22 編の論文を主に用いて、現在の吃音に関する研究知見や支援の現状についてまとめた (分析I)。また、実践研究に分類された 15 編の論文を主に用いて、吃音当事者やその関係者に対する支援の現状や、今後の支援の展望についてまとめた (分析II)。

分析Iの結果、疫学、二次障害の実態、当事者やその関係者が抱える支援ニーズ、支援の現状、吃音のある子どもの親が抱える心情、家庭におけるサポートなどについて、近年の研究知見をまとめることができた。支援の現状として、吃音臨床の分野においては言語聴覚士が主な役割を担っていること、自助グループにより独自の専門性に支えられた支援が行われていること、専門職と自助グループが並列的な位置づけで相互補完する形で存在すること、治療において認知行動療法など心理学の理論が取り入れられつつあることなどが読み取れた。子どもに特化した場合、学校現場における支援の現状として、吃音の理解、対人関係の調整、吃音症状抑制のための配慮、といった支援が担任教師を中心として提供されていること、さらなる支援の充実のために、教師への吃音に関する正しい情報提供や他児への障害理解教育が行われていること、家庭と在籍学級の橋渡しのような役割を担う通級指導教室などにおいて、どもっても元気に生活できることを目指す専門的な吃音指導が行われていることなどが読み取れた。また、分析IIの結果、吃音は低年齢で発症することが大半であること、吃音当事者に対する支援は医療機関において言語聴覚士が担うケースが多いこと、発話へ直接働きかける直接法と発話以外の側面や環境面に焦点を当てる間接法の双方を並行して取り入れながら治療が行われていることが読み取れた。

これらの結果から、吃音臨床の分野における公認心理師の役割として、心理的な安定状態を作り出す心理療法的なアプローチ、二次障害に苦しまないように吃音初期の段階から行うべき予防的支援、認知の変容を促すアプローチ、などが期待されると示唆された。

## 強みの認識・注目・活用感が自動思考および抑うつに及ぼす影響

8C22110 濱崎 萌果

(指導教員 道城 裕貴)

近年、強みを認識することや、自己や他者の強みに注目すること、強みを活用することが抑うつの低減に有効であることが明らかになっている。阿部他 (2021) は、強み介入に不可欠な構成要素として強みの認識・注目・活用感を挙げており、これらを促すことの重要性を指摘している。さらに、こうした強み介入を通し、抑うつを直接引き起こす自動思考の減少が認められた報告もある (末永・山本, 2014)。しかしながら、強みの認識・注目・活用感と自動思考の関連については検討が行われてきておらず、強みの認識・注目・活用感の自動思考を含めた抑うつへの効果に関する機序は明らかされていない。そこで本研究は、強みの認識・注目・活用感と自動思考の関連を明らかにし、その結果を踏まえて、強みの認識・注目・活用感が自動思考および抑うつに及ぼす影響について検討を行うことを目的とした。調査は、WEB による質問紙形式で実施し、青年期に属する 259 名を対象とした。調査に使用した質問紙は、自己評価式抑うつ性尺度、自動思考を測る ATQ-R 短縮版、強み認識尺度、自己のポジティブ側面への積極的注目尺度、他者のポジティブ側面への積極的注目尺度、強み活用感尺度によって構成された。

まず、相関分析の結果、強みの認識、自己の強みへの注目、他者の強みへの注目、強みの活用感と自動思考との間に有意な負の相関が示され、強みの認識、自己の強みへの注目、他者の強みへの注目、強みの活用感が高いほど、自動思考が弱いことが推測された。この結果を踏まえ、共分散構造分析を行ったところ、強みの認識・自己の強みへの注目・強みの活用感から自動思考を介した抑うつへの間接効果が認められ、媒介分析によりその有意性が確認された。これらの結果から、強みの認識、自己の強みへの注目、強みの活用感は自動思考を媒介して抑うつに影響を及ぼすことが明らかとなり、強みの認識、自己の強みへの注目、強みの活用感は、自動思考を抑制し、抑うつを低減することが示唆された。一方、他者の強みへの注目については自動思考と抑うつへの影響は認められなかった。

本研究結果から、強みの認識・自己の強みへの注目・強みの活用感を促す介入は、自動思考および抑うつを低減させる可能性があることが推測される。今後は、青年期を対象とした自己の強みの認識・注目・活用感を促す介入プログラムの検討・開発を進め、実践的な介入研究を通して自動思考および抑うつに及ぼす効果を検討し、本研究にて示唆された知見を検証していく必要がある。

## 大学生の受動的な Instagram 利用により生じる社会的比較が自己肯定感へ及ぼす影響

8C22111 (著者の希望により氏名不掲載)

(指導教員 難波 愛)

Instagram の利用率について、ICT 総研 (2022) による調査では、10・20 代の利用率が約 7 割と高いことが示されている。新井 (2022) では、社会的比較志向性が高く、周りとう上比較を行う傾向が強い人ほど、他者からの評価に敏感で、他者の投稿を見て羨ましいと感じ、その結果自分の評価を下げて落ち込みやすくなることが報告されている。

本研究では、Instagram を受動的に利用することで生じる社会的比較感情が自己肯定感へ及ぼす影響について検討することを目的とし、Instagram を受動的に利用することによって、他者と自分を比較する社会的比較感情が生じ、自己肯定感が低下するという仮説を設定した。本研究では、私立大学の大学生 298 名を対象とし、Qualtrics を用いて web 調査を行った。質問紙は、フェイスシート、Instagram の利用状況に関する質問、Instagram における社会的比較、それに対する自己認知、上方・下方比較の質問項目、大学生版自己肯定感尺度で構成されていた。また、解析には記述統計、相関分析、パス解析を使用した。

「Instagram の利用状況に関する尺度」から「社会的比較に関する尺度」、「社会的比較に関する尺度」から「自己肯定感に関する尺度」へパスを引き、共分散構造分析を行った。その結果、ストーリーに「いいね」をする頻度からステータス比較へ正の影響、ステータス比較から無条件の自己肯定、安定した自己へ負の影響があり、パスの繋がりがみられた。また、ストーリーの閲覧頻度から意見比較へ正の影響、意見比較から無条件の自己肯定へ正の影響があり、パスの繋がりがみられた。検討の結果、ストーリーへ「いいね」をすることで他者と自身のステータスを比較し、それによって自己肯定感が低下するという傾向がみられた。よって、仮説は一部支持されたといえる。

ストーリーへの「いいね」という同じ行為の中でも、ステータス比較、意見比較といった比較の方法が異なることで、自己肯定感への影響が異なることが示された。本研究では「ストーリーへ『いいね』をする」という行為によって、他者に対して上方比較を行い、その結果、自己肯定感が低下するのではないかと結論づけた。

今後の課題として、Instagram の利用の仕方がメンタルヘルスに影響が出る要因となると考える場合、能動的に利用する人と受動的に利用する人を比較して検討することが必要である。また、Instagram のアカウントを複数所有し、用途を分けて使用している人が大半を占めていたため、アカウントの用途別にメンタルヘルスへの影響を検討することが必要と考えられる。

## 大学生の特性シャイネスおよび社会的スキルがユーモア表出と受け取りに与える影響

8C22112 前阪 隆太

(指導教員 毛 新華)

対面コミュニケーションの中に、ユーモアというコミュニケーションのスタイルがある。ユーモアには、攻撃・遊戯・支援という分類があり、宮戸 (2016) は、ユーモア表出行動が対人関係における潤滑油的な機能をもたらすとしている。では、ユーモアを含むコミュニケーションを促進する要因として、どのようなものがあるか。倉元・大坊(2012)によると、コミュニケーションを促進するものとして、社会的スキルがある。この社会的スキルには、記号化と解読スキルがある。一方、コミュニケーションを阻害する要因としてはどのようなものがあるのか。對馬・松田 (2012) は、「特定の社会的状況を越えて個人内に存在し、情動的不安と対人的抑制という行動特徴を持つ症候群」として特性シャイネスを言及している。本研究では、この特性シャイネスがユーモア表出と受け取りにどのような影響を与え、社会的スキルとの関連についても研究することを目的とする。

私立大学に在籍する 151 名を対象とし、調査を行った。所要時間は約 15 分で、倫理的配慮についての説明を行い、同意を得た。本研究の質問紙は、フェイスシート・特性シャイネス尺度(16 項目)・内容変更したユーモア態度尺度(38 項目)・ENDE2 尺度(11 項目)で調査を行った。ユーモア態度尺度は授受関係が成立するように内容変更を行なった。

特性シャイネスの高低がユーモアに与える影響を調べるため、対応のない  $t$  検定を行なった。結果は表出される支援的ユーモアのみ有意差が見られた。次に特性シャイネスの高低と記号化・解読能力の組み合わせがユーモアに与える影響について参加者間分散分析を行った。結果は表出される支援的ユーモアのみ影響が見られた。最後に特性シャイネスがユーモアスタイルに与える影響を明らかにするため、記述統計量を示し、相関分析と重回帰分析を行った。結果は表出される遊戯・支援的ユーモアに影響が見られ、支援的ユーモアが最も影響を受けたことが確認された。

これらの結果から、表出される支援的ユーモアは特性シャイネスの影響を受けることが明らかになった。受け取るユーモアに関しては種類に関係なく特性シャイネスの影響はないことが明らかになった。記号化・解読のスキルに関して、ユーモア表出と受け取りに与える影響はないことが明らかになった。研究課題は、受け取るユーモアの調査に用いた質問紙の妥当性を十分に検討できなかったこと、発信者と受信者の関係性を明らかにすることができなかったこと、という 2 点がある。

## コロナ禍における労働環境の変化がワーク・ライフ・バランスに与える影響

### ——量的研究および M-GTA を用いた質的研究による検討——

8C22113 松田 涼

(指導教員 小久保 香江・中川 裕美)

本研究は 2 部構成となっており、研究 1 では、コロナ禍の労働者における仕事と家庭間の PS の決定要因について、探索的に検討することを目的とした。20 から 50 歳代の労働者 613 名を対象に WEB 調査を実施し、4 つの調査項目に回答してもらった。同居世帯のテレワーク経験と、仕事と家庭の境界管理がワーク・ファミリー・ポジティブスピルオーバー（以下、WFPS とする）およびファミリー・ワーク・ポジティブスピルオーバー（以下、FWPS とする）に与える影響について検討するために、WFPS、FWPS を基準変数、性別、年齢、中学生以下の子どもの有無、コロナ禍の仕事と家庭の境界（優先順位、時間管理、物理的環境、職場への希望、家族への希望）、自尊感情得点を説明変数とし、コロナ禍のテレワーク経験の有無別に重回帰分析を行った。その結果、中学生以下の子どもがいないことや仕事と家庭の境界における時間管理、自尊感情が関連していることが示された。子どもの有無や仕事と家庭の境界管理における役割の柔軟性が関連しているのではないかと考察された。研究 2 では、研究 1 で行った量的研究では検討できなかったコロナ禍にテレワーク経験のある労働者における WFPS、FWPS が生じた具体的な行動や要因について、世帯、家族構成などの環境面におけるより詳細な特徴なども踏まえて、質的研究を通して明らかにすることを目的とした。また、(a) どのような経験を通して境界やワーク・ライフ・バランス（以下、WLB とする）の変化の再構築に取り組んでいったのか、(b) コロナ禍のテレワークを通じて境界や WLB への影響が大きい世帯の特徴はどのようなものかというリサーチクエスションを設定した。対象者はテレワーク経験のある労働者男女 10 名とし、インタビュー調査の逐語記録を基に M-GTA を用いて分析を行った。その結果、3 個の CG、11 個のカテゴリー、27 個の概念が生成され、それに基づきコロナ禍における労働者の WLB への影響プロセスの概念図を作成した。コロナ禍のテレワーク経験のある労働者は、《仕事・家庭生活双方への影響》の【境界変化】を中心に《仕事における変化》、《家庭生活における変化》内の仕事や家庭における生活に影響を与えていることが分かった。コロナ禍のテレワーク経験労働者は境界が変化した環境に時間をかけながらも順応していき、コロナが収束しつつある中でも、コロナ禍のポジティブな経験をライフスタイルに取り入れて WLB を形成していくことが考察された。本研究より、一度は WLB が不安定になったとしても、環境に対する適応的な行動をとることが安定した WLB を継続していくために有効になるのではないかと考えられた。

## 病弱児とその家族の心理的支援

8C22114 (著者の希望により氏名不掲載)

(指導教員 小久保 香江)

令和 4 年度の文部科学省の調査によると、小・中学校を病気を理由に長期欠席している児童生徒は約 7 万 5 千人いると報告されており、その支援の重要性が指摘されている。本研究では、心身が病気のため弱っている状態が継続して起こる、又は繰り返し起こる病弱児を対象とし、病弱児の理解に関する研究、病弱児の家族支援について、親支援ときょうだい支援の観点から文献研究を行い、公認心理師が病弱児とその家族の心理支援においてどのような役割を担うことができるかを考察した。

全体を通して、病弱児の入院中の支援に関する論文は、看護師による研究がほとんどであり、医療現場での心理師の具体的な介入についてまとめた報告はほとんど見当たらなかった。病弱児の病気理解の研究として作文分析の論文を取り上げた。病気の語りは子どもの病気体験を理解するのに有効な方法であると考えられ、子どもの主観的な体験を理解することで、必要な支援を考察できる可能性があると思われる。

病弱児の心理支援の研究についてまとめた結果、病弱児のみでなく母親にも心理支援を行っていること、病気が多岐にわたり個別性が高いため支援の効果を測る難しさがあることが明らかとなった。家族支援の研究の検討から、入院時には家族の身体的・精神的負担が大きいことが明らかとなり、家族が自身の負担を相談できる場をつくることが求められることが分かった。きょうだい児支援の研究は介入研究が 1 件しかなく、入院が必要な病弱児のきょうだいにおいては、家族の関係性を良好に保つことが求められるため、保護者からの情報をもとに絵本を用いた支援が有効であることが明らかとなった。

本研究より、心理師の役割として、病弱児に対しては対象児の発達段階に応じた関わりを行うため、心理検査やカウンセリングなどを通じたアセスメントが求められると考えられる。また、病気の捉え方が健康関連 QOL に関連する傾向 (武井他, 2013) も示唆されているため、病気を前向きに捉えられるような関わりが必要であり、病弱児が自ら病気体験を想起して直面化することを支える存在 (中内, 2001) となることも求められるだろう。家族に対しては、家族の理解を深め家族支援ニーズを理解し、家族の希望や意向に沿う家族支援を実践する必要があるといえる (平谷他, 2018)。患児の治療にのみ重点を置かず、家族全体を含めた支援の体制を整えていくことが必要であり、きょうだいやその家族が置かれている状況の多様性に合った対応が求められる (永田他, 2015) ことから、医師や看護師、ソーシャルワーカーなど多職種と密に連携し、話を聞き助言するなどのコンサルテーションを行うことが重要である。

## 青年期の友人関係における親和動機と発言抑制が友人満足感に与える影響

8C22115 山根 梨瑚

(指導教員 山本 恭子)

発言の抑制は、友人関係を円満に築くための一種のコミュニケーション方法であると考えられる。本研究の目的は、近年希薄化してきているとされている友人関係において、友好的な関係を維持しようとする気持ちである親和動機が、発言抑制、友人満足感とどのように関連しているのか男女別で検討することであった。発言抑制とは、自発的か他律的に関わらず会話中に自分の意見や気持ちなどについて表出しない行動を指す(畑中, 2003)。

私立大学に在籍する男女 94 名を分析対象とし、web 調査を行った。所要時間は約 15 分で、倫理的配慮について説明を行い、同意を得た。本調査の質問紙は、フェイスシート、友人満足感尺度、発言抑制に関する尺度、親和動機尺度で構成されていた。友人満足感尺度は 6 項目で構成、発言抑制に関する尺度は、「相手志向」「自分志向」「関係距離確保」「規範・状況」「スキル不足」の 5 下位尺度、41 項目で構成、親和動機尺度は、「親和傾向」「拒否不安」の 2 下位尺度 18 項目で構成されていた。また、解析には記述統計、相関分析については SPSS、多母集団同時分析によるパス解析については Amos を使用した。

親和動機尺度から、発言抑制に関する尺度、発言抑制に関する尺度から友人満足感尺度にパスを引き多母集団同時分析を行った。その結果、パス全体に総合的な繋がりは見られなかったが、男女間での違いとして、男性の方が女性に比べて、親和傾向からスキル不足に負の影響、拒否不安からスキル不足に正の影響、相手志向から友人満足感に負の影響、関係距離確保から友人満足感に負の影響、規範・状況から友人満足感に正の影響が見られた。

男性の方が女性に比べ、親和傾向が低い、または、拒否不安が高いほどスキル不足により発言抑制をしやすいことに関しては、女性は抑うつや不安な時ほど自己開示を行い、他者に気持ちを伝えコミュニケーションをとり、スキル不足を補っており、男性は不安が高いと弱みを見せることを避けるため、コミュニケーションをとる際の話題が難しくなりスキル不足を感じやすくなるのではないかと推測する。次に、相手志向、関係距離確保による発言の抑制が友人満足感を低めているということに関しては、自己開示の男女差が関係すると考えられる。相手のために思い発言を抑制することは男性の性役割から反するため、相手志向、関係距離確保が友人満足感を低めるのではないかと考える。しかし、規範・状況による発言抑制は満足感を高めていた。相手志向は、1 人や個別を連想させ、規範・状況は大勢やルールなどを連想させるため、個別ではなく、大勢のことを考え対応できたとき、男性は友人満足感を高めているのではないかと推測する。

今後の課題として、ネガティブ感情を表出することを抑制している可能性が高い男性のサポートをどのように行っていくか検討すること、スキル不足を感じやすい女性は精神的に負の影響を受けやすい可能性がみられるため、どのような介入を行っていくべきか検討するという 2 点が挙げられる。